

擬制的親子関係の研究

荒井和美

——その展開をめぐる——

一 はじめに

実の親子以外に他人をオヤ・コとする慣行は、主に民俗学では「オヤコナリ」、社会学では「擬制的親子関係」などといわれ、日本の各地から様々な事例が報告されている。この慣行に関する研究を見ると、その源流は柳田國男氏にまで遡ることができる。しかしその柳田氏の研究は、その後大きく二つの方向に分かれて、継承され、発展してきたように思われる。そこでここでは、この二つの流れの系譜を整理するとともに、擬制的親子関係の研究の問題点について触れておきたい。⁽¹⁾

二 柳田國男氏の研究から

柳田國男氏は、昭和の初めごろからこの慣行について研究を展

開しているが、この研究は大間知篤三氏、大藤ゆき氏らへ継承される呪術性についての研究と、磯田進氏、服部治則氏らの村落構造類型の研究との二つに分岐してくるように思われる。ここではまず、その二つの源流となった柳田氏の研究を見ることにする。

柳田氏はオヤコナリについて「自分の當然のオヤがもう居ないか、もしくは其力が餘りに弱いと感ずるときに、特に他人をオヤと頼むといふ慣習」と説明し「柳田 一九八四、八五」、さらに「日本人のごとく、人をやたらにオヤにする慣習を持っていた民族も稀である」と述べている「柳田 一九九〇a、三三三」。しかし、他人をオヤとすることがいつでも行われていたわけではなく、オヤコナリの機会は、「主要なるものが人生に二度あった」としている「柳田 一九九〇b、五〇八」。二度というのは、「生れた当座に一度、次には第二の誕生とも言われる元服成人の際」であり、それが三度、四度となったのは変遷だという「同右、五〇八」。

誕生の際にとるオヤについては柳田氏は、例を挙げると「社会と子ども」の取上親の項では次のように述べている。「生まれて来る者の周囲には、生みの父母を始めとして、一族一村、すべてその生存を承認しようと待ち受ける者たちで満ちていたのだけれども、なおそういう中に親が自分たち以外の、特に力を分かつて助け合うべき人を見立てて頼まずにはいられなかった」として「柳田 一九九〇c、二九七」。また九州では取上親をコズエバと呼ぶ地域があることから、「生まれ子をスエルというのも、人の中に加えるという意味に解してもよいようである」と述べ、さらに拾い親との関連からも「取り上げるといことが、活かす大きな力であつたらしい」としているのである（同右 二九六・七）。これらを見ると、出生に関わるオヤが何らかのチカラをもっており、それがコの生存のためには必要であつたようである。

一方、取上親をとることは「これが生存の最大危機であり、親の不安の最も切なる時だからということもあるが、実はこの親子成りの契約というものは、壮年期に入ってからでもなお繰り返されている」と述べているように「柳田 一九九〇c、二九七」、誕生の直後にとるのではないオヤについての言及も見られる。たとえば、カナオヤの項ではオヤをとることにについて、「兎に角結婚する者の後盾としたいのが、一つの動機であつたことは争はれぬ」と述べ「柳田 一九八四、一三四」、出生時でなくともオヤが必要であつたことに触れている。カナムスコの項でもさらに、「自分などは是を取上親・拾ひ親・名付親と同じに、又男の子に

烏帽子を着せるのと同じ意味に、少女を完全なる一箇の女性とする力をもつ者が、亦一人の親であるといふ考え方の、古く存在した痕跡と認めて居る。親が人の生存の一つの源泉だといふ點は、生みの親も異なる所が無かつたのである」と述べている（同右 一三四・一三五）。ここではオヤをとる時期の区別というよりは、むしろ、生物・社会的な面の両面においてオヤが必要であつたことを示唆しているように思われる⁽²⁾。

柳田國男氏はこのように出生時とそれ以外の時にとるオヤの両方に言及しているが、殊更に区別をして、各々のオヤコ関係の性質について論じてはいないようである。しかし、このような柳田氏の研究のあとの一つの流れとして、どのような人をオヤにとるか、その人がどのようなチカラを持つのか、またコがどのような状態なのかといった点から、この二つの時期のオヤコナリの性質について考察が進められていく。その際、郷田洋文氏、平山和彦氏に至るまでは、この二つの時期の性質は別々に論じられることが多かったようである。

もう一方の流れとして、柳田氏のオヤ・コという言葉の変遷から発展していったものが挙げられる。柳田氏はまず、オヤ・コという言葉を考える際にシンルイという語に着目した。これは「固有の日本語ではない」とし「柳田 一九九〇a、三二〇」、日本の中でシンルイをオヤコ、あるいはイトコと呼ぶ地域が広範囲にわたっていることに注意している。この二語の差異については「オヤコは縦の族長族人の間柄、イトコは横の関係すなわち族人

どうしの縁故を意味していた」と述べ〔同右 三三〇〕、このタテの關係を持ったオヤコというものを「一つの共同労働団」と捉えている〔柳田 一九九〇b、五二四〕。つまりオヤは労働指揮権を持つ者であり、コは労働者となり労働組織を形成していたというのである。柳田氏は「オヤを必ず生みの親、そのコを必ず生みの子に限るようになったのは、実はまた国民の思想の変遷に過ぎぬのである」と述べ〔柳田 一九九〇d、三七八〕、オヤという言葉の示す範囲に変化のあったことを示唆している。

また、この共同労働団には「親族性（血縁性）」は本来は必ずしも必要なものではなかった」という〔鳥越 一九九〇、六九七〕。このような点に注目をし、同族には非血縁者が含まれるという方向で研究を進めたのが有賀喜左衛門氏である。上野和男氏はその有賀氏の研究を「日本におけるオヤコ關係の研究であり、親子關係を軸として、日本の家、同族、社会構造を理解しようとしたのであって、これは柳田国男に発する大家族論の立場での日本研究の一つの到達点であった」と位置付けている〔石川ほか 一九八七、三五〕。

このような有賀氏の研究には、及川宏氏、喜多野清一氏から異なった見解が示される。喜多野氏は同族を「本家の家権威を中心として、（中略）系譜關係に連繫されている家の連合体」と規定し〔喜多野 一九七六 九〕、このような性質を持つ同族組織と親方子方慣行を、山梨県北都留郡桐原村大垣外部落の事例から分析している。

このようにして、柳田氏のオヤコという言葉の変遷をたどる研究が、有賀氏、喜多野氏などを通して、親方子方慣行と同族組織、村落構造についての研究へと発展していったと思われる。

これまで柳田氏の研究を振り返り、そこからどのように二つの流れが展開したかを検討してきたが、次節以下は各々のそれ以降の研究を見ていくことにしたい。

三 「呪術性」について

(1) オヤコナリと呪術性

柳田氏の研究を継承し、さらにオヤコナリの持つ性質についての考察を進めたものの一つとして、大間知篤三氏の研究が挙げられる。大間知氏はオヤコナリの機会を「古くは二度、後には三度であった」とし〔大間知 一九七五、三八〕、各々の場合にオヤとなる人やオヤを依頼する理由などから、この三つのオヤコナリの持つ性質について説明している。つまり仮親をとる機会、出生時ないし幼少時、成年式時、移住・就職の際の三度であり、幼少時のものは呪術的宗教的背景、成年式時のものは呪術性も見られるが経済的社会的背景が濃く、移住の際のものは経済的社会的要素が強く見られるとしている〔大間知 一九七五、三八〕。また「呪術的親子」の中でも幼少時、成年式時のオヤコナリの性質について同様のことが述べられている〔大間知 一九七八、一四

五」。

このように大間知氏は、オヤコナリの各々の時期の性質について考察をしている。しかし、幼少時のオヤコナリにも社会経済性、成年期のものにも呪術性が見られるとしながらも「大間知 一九七五、三八・一九七八、一四五」、それがどのような点なのか具体的に触れられていない。また二つの時期のオヤコナリについて「親取りの直接の動機に（中略）差はあるが、親子間の義理交際には多分の類似性があり、いずれが古くいずれがその模倣であるとも容易に断言し難く、ともに、少なくとも今日の日本の都会に見る如き小さな家族を単位として社会が構成される以前に、それぞれが必要から発生したものであることだけは断言されえよう」と述べられているが「大間知 一九七八、一四五」、そこではこの点についての詳述はしていないようである。

柳田氏は「親方をとるのは成年期の行事で、幼少時代の親子な里には親方といふ語は用ゐられない」と述べており「柳田 一九八四、八八」、和歌森氏も親方子方関係と仮親子関係に分けて論じている。「成年期にとる仮親は、社会人としていわば村の公にまみえるにあたっての仮親」、「誕生後間もなくしてとる仮親は、とにかく人間として人生航路を歩んで行こうとするにあたって」のもので、社会的に不安定なときに結ばれるのが親方子方関係、社会的に不安定だけでなく、身体的にも不安定なときに結ばれるのが仮親子関係としている（「和歌森 一九八一、七四」。さらにこの親方子方関係は、同族が崩れていく過程で「同族でないも

のが同族関係にはいつて互いに頼み頼まれる関係となるよう親方・子方の結成儀礼が行われたのであらう」とし（「同右 七九」、この時親を村の名望家に依頼していることから、「親方どろ」という習俗には、もと経済的・心理的理由があった」と説明している（「同右 八〇」。和歌森氏は、大間知氏と同様に成年式時のオヤコ関係には経済的要素の見られることを指摘しているが、この中ではその時の呪術性や二つの時期のオヤコ関係の関連については触れていない。

郷田洋文氏も和歌森氏のように、親方子方とそれとは異なるオヤコ関係のあったことを示唆している。それまでは幼少期のものと成年期のオヤコナリの性質は分けて考えられていたが、郷田氏は前者に成長への不安、後者に社会へ出ていく上での不安があり、それがオヤを求めることにつながっている点を指摘し、両者の共通性に触れている。さらに、出生直後でないオヤコ関係にも呪術性のあることは指摘されてきたが、郷田氏はその点について、厄年に生まれた子の例を挙げて具体的に述べている（「郷田 一九六〇、二八一〜二八二」）。

その後、平山和彦氏が靈魂観からオヤコナリを捉え、二つの時期のオヤコナリを再検討している。平山氏は通過儀礼を「魂の死と復活のくり返しにともなう呪術的な儀式」と捉え（「平山 一九七八、一二七」、その典型として人の誕生や成年式を位置付けている。そして出生時にオヤをとることは「健康な他人の大人をオヤとし、そのコとなることによって衰弱した靈魂に活力を付与す

ることを図ること」であり、成年式では「靈魂が一度死んだと見なし、再生にあたつて他人のオヤから新たな生まれ替わりに擬すること」だとしている〔平山 一九七三、六六〕。つまり「いったん死んだ魂が生きかえるにはその場に当然生みのオヤとは違う、別のオヤが必要なのではないか」として、この二つの時期にカリオヤをとることに「同質の要素」があると述べている〔平山 一九七八、一二七〕。

またオヤコナリの性質についても、幼少期のものと成年期のものの関連についての言及が見られる。これまで成年期のオヤコナリには社会経済性が強く見られることが指摘されてきたが、それは幼少期に見られるように「元は付随していた呪術性が忘れられたか、あるいは、比較的后代になって、呪術的な関係に経済的な庇護・奉仕という性格が増し加えられていったということも十分に考えられる」と述べている〔平山 一九七八、一二七〕。このように平山氏は、さらに積極的に幼少期、成年期のオヤコナリの性質について論じ、これまでの研究に新しい展開を示したと思われる。

(2) オヤと女性の持つチカラ

前節で見たように、幼少期のオヤコナリの呪術性は指摘されていたが、大藤ゆき氏も取上親について「取上げるといふ言葉は、人間界に子供を引き上げる、この世の仲間に取り入れるという意味」と述べ〔大藤 一九六八、五三〕、その呪術性に言及してい

る。また、この取上げるといふ行為には技術的なものと精神的なもの二種類があると区別している。同じように産婆と呼ばれるにしても「精神的なトリアゲ」の場合には、生児と一生の親子関係を持つとし、さらにこれを「直接助産の手助けをしてなお生児と親子の関係を結ぶもの」と、助産には直接関係せずに生児との関係を結ぶもの」とに分けている〔大藤 一九六八、五七〕。

これらの点をオヤの持つチカラというよりも、もう少し女性の持つチカラとして考察を進めたものの一つに、鎌田久子氏の研究が挙げられる。鎌田氏は「出産に立ち会いながら手を下さないトリアゲババは、何の為にこの場に臨むのであろうか」という疑問から、ババは「即ち産神の司祭者あるいは産神の憑代となる巫女的性格を持つ者といつてよいかもしれない」と考察している〔鎌田 一九六六、五七〕。このような性格を持つ者を鎌田氏は近年「呪術的助産婦」とし、出産に際して技術的な援助しからない助産婦とは区別している〔鎌田 一九九〇、一四七〕。「ウバの力」においても、積極的に女性の持つチカラに触れており、「あの世からこの世に子供の生命を送り出してくれるのがババとよばれる女性であると共に、この世においても、また子供の生命をこの世に引きあげようとするのは、トリアゲババとか、コズエババなどとよばれる産婆である。即ち前世と現世の境をはさんで、両方の境にババとよばれる女性が、人間の生を司っていたのである」と述べている〔鎌田 一九七五、八〕。このように鎌田氏は、オヤとなる人、殊にそれが女性である場合に持っているチカラについ

て、研究を進めている。

以上のように柳田氏の研究から、一つの流れとして呪術性をめぐるものが出てくるが、それはオヤコナリの性質と女性の持つチカラという方向へ展開していったといえよう。

四 村落構造をめぐる研究へ

(1) 親方子方慣行と村落構造

オヤコを「共同労働団」と捉えた柳田國男氏の研究から、同族団についての研究へと展開した流れが一つ挙げられることは前述した。その同族と親方子方慣行の関係を論じたのが喜多野清一氏であり、大垣外部落の事例から以下のように論じている。大垣外では結婚の際の仲人親が親分となり、それは家ごとに世襲的に固定されている。親分となるのは本家で、分家が子分となり、同族組織と親方子方の関係が一致した形となつて、高橋という同族の総本家を中心としたヒエラルキーが見られるという〔喜多野 一九四〇a・b、一九五九を参照〕。また同族と親方子方は結合の契機が異なるとして両者を区別している。後者は「現実生活の實質の庇護奉仕」に結合の契機があり、同族のように「家の系譜の權威の支配服属の関係を必須としない」という〔喜多野 一九六〇、四二〕。

このあと磯田進氏が村落の類型化を試み、その中で同族と親方

子方慣行の関連について論じている。磯田氏は村落構造を「家格型」「無家格型」の二つに類型化している。「家格型」は(1)その村落を構成する個人の社会的、政治的な価値が、個人の属する『家』の価値によって決定されていること(2)その『家』の格づけが超世代的に固定されていること」という二点が本質をなす「家格制」の存在する村落で〔磯田 一九五一a、五〇―五一〕、それが存在しない「無家格型」とに区別した。さらに「家格型」を「同族型」と「非同族型」とに分けている。前者は「本家・分家関係が村落社会構造上重要な意味を持ち、いわばその『背骨』をなしている場合」であり、後者は「本分家関係がそれほど重要な意味を持っていない場合」である〔磯田 一九五一b、四〕。

磯田氏は、「非同族型」村落である島根県邑智郡都賀行村潮部落の事例から、同族と親方子方関係の関連について次のように説明している。潮部落では、男性の場合ケ・ヤクオヤ・コ、女性の場合カナオヤ・カナムスメが親分子分の関係であり、親分は自分より上の家格の家を依頼するという。このことからここでの「擬制的親子関係が、『同族型』村落の場合の同族(本家・別家)関係と同様の機能を、村落構造上いとなんでいる」とし〔磯田 一九五四a、五九〕、「その意味において、この場合には擬制的親子関係が同族関係に代位しているといってもよいであろう」と結論づけている〔同右 五七〕(傍点は磯田氏)。一方「同族型」村落としては、喜多野氏が調査を行った大垣外部落の事例を挙げている。大垣外の本分家関係では「直接対人的な、身分的な支配・従

属関係が存在し得るであろう」としているが〔磯田 一九五四b、四〇〕、それだけでは同族の範囲を越えて村落全体を覆うようなヒエラルキーの形をとるには十分でないという。それに擬制的親子関係を重ねてみると、同族の範囲を越えた支配従属関係が見られるようになる。つまり「この場合の擬制的親子関係は、村落ヒエラルキーをささえ、それをすぎ間なく裏うちし、そのことによってそれを十分堅確ならしめて行くための契機として、本分家関係を補充する役割をいとなんでいる」と述べている〔磯田 一九五四b、四一〕。このように磯田氏は村落の類型化をし、「同族型」、「非同族型」村落における擬制的親子関係の機能を論じたのである。

(2) 村落構造の「型」について

磯田氏は「家格型」「無家格型」に村落構造を大別したが、後者については検討されなかった。しかしこの村落構造の類型と擬制的親子関係の関連を考察した研究を受けて、これ以後は「親子分関係を単一のものとしてではなく、さまざまな類型設定が可能なる多様な拡がりとしてとらえたうえで、特定の村落構造の型と特定の親子分関係の型の対応関係の問題へと展開をみた」のである〔上野 一九九二、九〇〕。そしてこのような方向で展開させていったものに服部治則氏の研究が挙げられる。服部氏は山梨県南巨摩郡早川町上湯島部落の親子分関係の事例を取り上げて考察するとともに、「家格制」「血縁性」の指標に基づいて村落

構造の四類型を提示している。

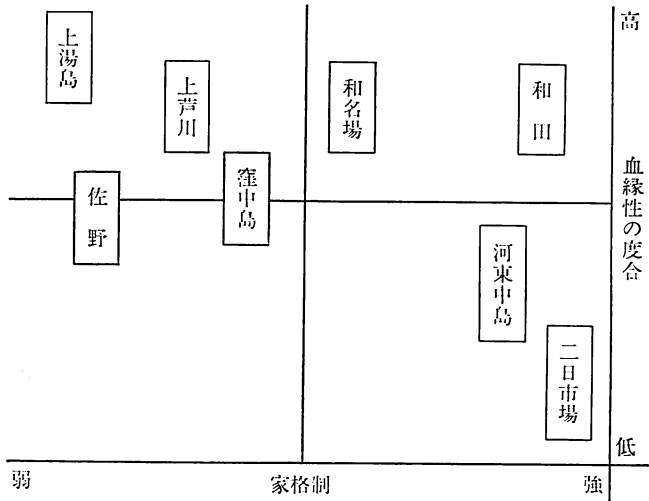
上湯島部落の事例は、同じ山梨県内ではあるが喜多野氏の考察した大垣外部落とは異なった様相を呈していることが明らかにあった。このような擬制的親子関係の差異は、森岡清美氏によって「大垣外型」「上湯島型」と名付けられ、親子分関係の代表的な型とされている。上湯島の事例でも、親分となるのは結婚に際してオヤとなる人で、男性のエボシオヤ、女性のカネツケオヤである。しかし仲人親はこれらのオヤとは別にたてる。服部氏は部落内の家の系譜、シンルイ関係をみたあと、ナヅケオヤ、カネツケオヤ、オヤブン（エボシオヤ）をどの家に依頼しているか、すべて同じ家かどうか、またその関係が固定的かどうかについて本分家の表を用いて分析している。そして上湯島の場合には、大垣外の事例とは異なり、「本分家関係と親子分関係が複合せず、本分家が相互に親分たり子分たりえ、ヒエラルキーを構成せず家相互の関係が平板である」と結論付けている〔服部 一九八〇、五一〕。

服部治則氏はこのあと、「大垣外型」「上湯島型」の二つの型に、山梨県下でみられた親子分関係を分類するとともに、各々の部落の村落の構造類型を問題にした。「村落構成の単位は『家』であるところから、家と家との結合関係の型が村落構造の類型を決定するという前提に立ち、家相互の関係が、縦の支配従属関係か、横の平等な相互扶助関係かという観点より、そのどちらかが村落構造に支配的かという」「家格制の有無」を一方の軸として、

表1 服部治則氏の示した四類型⁽³⁾

		家格制の有無	
		家 格 型	無 家 格 型
血縁性の度合	血 縁 型	同 族 型	親 類 型
	非血縁型	家格型・非血縁型 (地主型)	講 組 型

図1 山梨県下の親分子分関係を家格制、血縁性の指標をもとに分類したもの（服部氏作成）⁽⁴⁾



このような服部氏の研究のあと、親分子分慣行の事例報告と共に、村落構造の類型化がなされていったようである。⁵⁾ 次のその例をいくつか挙げることにする。

江守五夫氏は、日本の東北部では同族制を、西南部では年齢階梯制を基本原理としており、村落の構造が異なっていると述べている。またそこでみられる擬制的親子関係にも差異があるとして、二つの形態を設定し、東北部でみられるものを「家父長的『家産制的形態』」、西南部のものを「年齢階梯的形態」としている（江守 一九六五、三）。

もう一方は「血縁の原理（或いは血縁を擬制する養子を含む）を契機とするか、そうでないか」という観点で、血縁の原理に基づく家の関係が村落結合において支配的かそうでないかという「血縁性の度合」の二つの指標から、村落構造の四類型を示した（服部 一九八〇、三六九）（表1、図1参照）。

また上野和男氏は親分子分関係の構成形態に注目して、構成要素、親分の村内での位置、依頼関係の形態を指標に「集中的構造」「拡散的構造」の二類型を設定した（上野 一九九二、九一）。「集中的構造」というのは「大垣外的事例に代表されるように親分子分関係が特定の家に集中してピラミッド型の構造を形成するもの」で、「拡散的構造」は「神子原・上湯島・下芦沢の型で親分子分関係が特定の家に集中せず、したが

って親分層・子分層が形成されず、むしろどの家も親分になり子分になって、親分子分関係が連鎖的にムラ全体をおおう構造を形成するもの」だとしている（「上野 一九七三、三一」。この「集中的構造」は「同族結合」「家格型」と、「拡散的構造」は「講組型」「無家格型」の村落構造と対応するものであるという（「上野 一九九二、一二二」）。

福田アジオ氏はまず、オヤコナリと親分子分を役割と関係の継続する期間によって区別した。「締結の時期や名称のいかに関係なく、オヤがコに対して同様の包括的な保護を長期間持続的に与えるオヤコ関係」を親分子分とし（福田 一九八〇、一六一）、誰をオヤとするか、そのオヤコの関係の連鎖がどのようになっていくかという点から、大垣外と静岡県熱海市初島の事例を用いて論じた。大垣外では「本家分家という祖先中心的な系譜関係に基礎をおき、超世代的に持続」しており、初島では「自己中心的な親類関係との関連を示している」という（同右 一七五）。これを「関係を締結する両当事者の関係」から類型化し、大垣外の事例を「祖先中心型」、初島のものを「自己中心型」と名付けている（同右 一七六）。前者の型は「大垣外型」「集中的構造」と後者の方は「上湯島型」「拡散的構造」と適合関係にあるという。

以上のように柳田氏から派生したもうひとつの流れは、同族組織、村落構造の類型化をめぐる方向へ展開していったといえよう。

五 おわりに

これまで擬制的親子関係に関する研究の流れをたどってきたが、最後にこの研究についての問題点に若干触れておきたい。これまでは、親分子分の問題でいえば、「擬制的親子関係」の概念規定や同族制の顕著な村落に調査地が偏っていたような点が、問題点として指摘されてきた。⁽⁷⁾その他として、まず類型化の問題に触れておきたい。事例が報告される際に、「大垣外型」「上湯島型」或いは「集中的構造」「拡散的構造」などたいてい二つに分類されている。しかし類型化の内容や指標が一樣でない点やその調査地の地域差を考慮するならば、どちらかの型に無理なく位置付けられるのであろうかという点が、問題として残されているように思われる。

さらに、福田アジオ氏も指摘しているように、⁽⁸⁾これまでは一つのムラのなかに幾つかのオヤコ関係が見られたとしても、そのうち一つを論じているものが多く、オヤコ関係同士の関連（たとえばトリアゲオヤにオヤブンを依頼するかといったことなど）は殆ど触られていなかったように思われる。オヤブンにしてもヒロイオヤにしても、機能や構造のほか、ムラによって一つ一つのオヤ（コ）の位置付けが異なるということも考えられる。つまりムラによってどのオヤコ関係（或いは幾つかのオヤコ関係の組合せ）が重要であるのかが異なっているのではないのだろうか。にもか

かわらず、このような点については十分な検討がなされてこなかったように思われる。そのムラにおける擬制的親子関係の位置付けという視点も必要であるといえよう。このような視点に立った研究が、これからの課題として残っているように思われる。

注

(1) ここで擬制的親子関係としているのは、他人をオヤ・コとする関係のことで、実の親子や養子、婚姻による義理の親子関係は含んでいない。

(2) 出生期、成年期の親について「人の中に加える」「少女を完全なる一箇の女性とする」と述べており、これには生物的な面と社会的な面の両方が考えられる。しかし柳田氏がそれから二つの面をどのようなものと捉えているのか、またこれらのうちどちらかに重点をおいて考えているのか、或いは両方を想定しているのかについてはよくわからなかった。また、オヤの持つチカラについても、どのようなものと考えているのか、そのチカラを持つ人をどのような人だと考えているのかについても把握できなかった。柳田國男氏の研究を継承した一つの流れは、幼少期のオヤコ関係を中心に、社会関係よりは呪術性を問題にした方向で展開していったが、それは柳田氏のどのような点を継承していったからなのであろうか。前述の疑問点とは何か関連があるのだろうか。今後の課題としておきたい。

(3) 服部治則 一九八〇、三七〇

(4) 服部治則 一九七三、六

(5) ここでは類型化されたものとして磯田、服部、江守、上野、福田氏のことを挙げているが、各氏の示された類型化の内容やそれを分析するために用いた指標が一樣ではないと思われる。本稿ではその点についての検討が未だ不十分であり、稿を改めて考えてみたい。

(6) 江守五夫氏は、この論文において年齢階梯制下の擬制的親子関係を扱い、村落構造の類型化をしている。しかし、ここでは比較民族学の立場から、そのような村落における擬制的親子関係の「原型」を捉えようとしているのであり、磯田進氏や服部治則氏などとは視点が異なると思われる。

(7) たとえば「社会伝承研究Ⅱ」一九〇二頁がある。

(8) 福田アジオ 一九八〇、一五九

参考文献

青柳清孝 一九六一 「親分、仲人、名付親の慣習について」山

梨県南巨摩郡早川町雨畑本村』『日本民俗学会報』二〇

天野武 一九七八 「親分子分関係の展望」『日本民俗学の課題』

弘文堂

有賀喜左衛門 一九七〇 『有賀喜左衛門著作集 第九巻 家と

親分子分』未来社

石川栄吉、梅棹忠夫ほか 一九八七 『文化人類学辞典』弘文堂

磯田進 一九五一 a 「村落構造の二つの型」『法社会学』1

磯田進 一九五一 b 「村落構造の『型』の問題」『社会科学研

究』第三卷二号

磯田進 一九五四 a 「農村における擬制的親子関係について

(1) 同右 第五卷三号

磯田進 一九五四 b 「農村における擬制的親子関係について

(2) 同右 第五卷四号

井之口章次 一九六〇 「誕生と育児」『日本民俗学大系』四卷

平凡社

上野和男 一九六九 「擬制的親子関係と村落構造」『講座家族』

六卷 弘文堂

上野和男 一九七三 「親分子分関係の構造類型」『社会伝承研

究Ⅱ』社会伝承研究会

上野和男 一九九二 「親分子分関係の構造類型」『日本民俗社

会の基礎構造』ぎょうせい

江守五夫 一九六五 「擬制的親子関係の年齢階梯的形態」『法

律論叢』第三八卷六号

江守五夫 一九七六 『日本村落社会の構造』弘文堂

及川宏 一九六七 『同族組織と村落生活』未来社

大藤ゆき 一九六八 『兄やらひ』民俗民芸双書二六 岩崎美術

社(一九四四初出)

大間知篤三 一九七五 「家についての覚書」『大間知篤三著作

集』第一卷 未来社(一九三九初出の修正)

大間知篤三 一九七六 a 「親方子方」『大間知篤三著作集』第

三卷 未来社(一九三五初出)

大間知篤三 一九七六 b 「成年式の民俗」同右(一九五九初

出)

大間知篤三 一九七六 c 「生と死と子供」同右(一九五八初

出)

大間知篤三 一九七八 「呪術的親子」「神津の花正月」『大間

知篤三著作集』第四卷(一九四三初出)

鎌田久子 一九六六 「産婆とその巫女的性格」『成城文芸』第

四二号

鎌田久子 一九七五 「ウバの力」『日本民俗学』九八号

鎌田久子他 一九九〇 『日本人の子産み子育て』勁草書房

川島武宜・潮見俊隆 一九四七 「カネオヤについて」『民族学

研究』第一二卷一号

喜多野清一 一九四〇 a 「甲州山村の同族組織と親方子方慣

行」『民族学年報』二

喜多野清一 一九四〇 b 「同族組織と親方子方慣行資料」同右

三

喜多野清一 一九五九 「甲州山村の親方子方」桐原村大垣外の

デルキとオヤブン・コブシ」『大阪大学文学部紀要』七

喜多野清一 一九六〇 「親方子方」『日本民俗学大系』四卷

平凡社

喜多野清一 一九七六 「同族組織と封建遺制」『家と同族の基

礎理論』未来社

郷田洋文 一九六〇 「厄年・年祝い」『日本民俗学大系』四卷

平凡社

篠崎征子 一九六〇 「取上げ親子く千葉県九十九里町付近」

『日本民俗学会報』一五

社会伝承研究会編 一九七三 『社会伝承研究Ⅱ』

曾我猛 一九九二 『農村における擬制的親子関係く法社会学的

研究』御茶の水書房

鳥越皓之 一九八五 『家と村の社会学』世界思想社

鳥越皓之 一九九〇 「解説」『柳田國男全集』一二卷 筑摩書

房

服部治則 一九七八 『親分子分と本分家』御茶の水書房

服部治則 一九八〇 『農村社会の研究』御茶の水書房

平山和彦 一九七一 「親族と同族く研究史と課題をめぐる覚え

書」『日本民俗学講座』二卷 朝倉書店

平山和彦 一九七三 「擬制的親子の民俗とその変遷く茨城県勝

田市の事例報告」『茨城県史研究』二六

平山和彦 一九七八 「いわゆる『親子成り』について」『日本

民俗学の課題』弘文堂

福田アジオ 一九六六 『若狭大島の親方子方制度 若狭の民

俗』吉川弘文館

福田アジオ 一九七三 「親分子分研究の動向と問題点く研究会

の活動を通して」『社会伝承研究Ⅱ』

福田アジオ 一九八〇 「親分子分」『講座 日本の民俗2』有

精堂

柳田國男 一九八四 『族制語彙』国書刊行会（一九四三初出）

柳田國男 一九九〇a 「オヤと労働」「家閑談」『柳田國男全

集』一二卷 筑摩書房（一九二九初出）

柳田國男 一九九〇b 「親方子方」『柳田國男全集』一二卷

筑摩書房（一九三七初出）

柳田國男 一九九〇c 「社会と子ども」「家閑談」同上（一九

四一初出）

柳田國男 一九九〇d 「大家族と小家族」同上（一九四〇初

出）

和歌森太郎 一九八一 「親分子分」『和歌森太郎著作集』第一

〇卷 弘文堂（一九五一初出）

（東洋大学大学院 民俗学・社会学）